

《インタビュー記録》

歴史教育体験を聞く

原田善治先生

日時：2013年9月22日

場所：埼玉県さいたま市中央区

聞き手：鈴木正弘・茨木智志・大木匡尚

はじめに

「歴史教育体験を聞く」の目的は、歴史教育に携わってきた先生がたの歴史教育の体験、すなわち自分が受けてきた歴史教育、そして自分が行なってきた歴史教育の話を軸として、さまざまな経験や思いをインタビューの形で聞き取り、その記録を活字にすることで、歴史教師の共有の財産とすることにある。

今回のインタビューは、原田善治(はらだ ぜんじ)先生がお引き受け下さった。原田先生は1937年のお生まれで、国民学校2年生で敗戦を迎えて、以後、戦後の教育を大学まで故郷の秋田市で受けてこられた。秋田県、後には埼玉県の中学校社会科教師を勤められ、高校に異動してからは、「世界史」に加えて新科目であった「倫理・社会」や「現代社会」などにも研究会を通じて取り組まれてきた。同時に、東洋史の研究にも従事され、その取り組みは現在も継続している。

以下は、原田先生のインタビューの記録である。

1. 戦争中の国民学校

— 本日はよろしくお願ひいたします。まず、生い立ちからお聞かせ下さい。

私は、昭和12(1937)年10月に、秋田県秋田市豊島町2番地¹で生を享けました。家は雑貨屋で、五男二女の末っ子でした。母は私が1歳半のときに、父は終戦の年の10月に亡くなっています。父はもともと蠟燭職人^{ろうそくしやくじん}でした。雑貨屋は母が基本的にやっていたようで、塩・砂糖・タバコなどを売っていました。私は幼稚園には入園しませんでした。

昭和19(1944)年4月に、旭北国民学校初等科^{きよくほく}²に入学しました。1～2年生のとき

¹ 現在の秋田市大町5丁目付近。

² 現在の秋田市立旭北小学校(秋田市山王)。

は、クラスが3つで、すべて男女共学のクラスでした。3年生からは男子のクラス、女子のクラス、男女混合のクラスに分かれることになっていましたが、戦後は、3年生からも男女共学のクラスのままになりました。ですので、私はずっと男女一緒のクラスでした。1年生のときの読み方の教科書は「アカイ アカイ アサヒ アサヒ」でした³。

— 戦争中の国民学校の様子をお聞かせ下さい。

戦争中と言っても、2年生の1学期までですので、あまりよくは覚えていません。出征兵士の見送りはありました。それから、「ぎょくさい」（玉砕⁴）という言葉をよく覚えています。たぶん大人たちの話から聞いたのだと思います。サイパン島・硫黄島・沖縄などと結びついて「ぎょくさい」と聞きました。とにかく敵が本土に上陸して来ても最後の一人まで竹やりでもって戦うと言われていました。

将来は、陸軍の幼年学校から士官学校に行くと、自分も言っていました⁵。兄たちが陸軍で出征していたこともありましたので。長兄は私よりも21歳上で、両親は早くに亡くなりましたので、私は長兄に育てられたようなものでした。その長兄が出征していました。長兄は、福島的高等商業学校⁶を卒業して、予備士官学校を出て、陸軍中尉として秋田の歩兵第17連隊にいました。終戦のときにポツダム大尉となって帰ってきました⁷。また、次兄も出征して、中支⁸に行っていました、帰ってきました。

それから、学校では厳しくやられました。私は行儀が悪くて、きちんと立っていられなかったようで、担任は女性の先生でしたが、よく手をたたかれました。

覚えていることの一つに、四方拝⁹のときのことがあります。これは正月の1月1日に学校で行われる行事でした。このときに学校でバタバタと低学年の子どもが倒れたのを覚えています。この頃は腹いっぱい食べられるのは盆と正月くらいでしたので、普段食べていないものを、たくさん食べて学校に来たため、嘔吐してしまったのかと

³ 文部省『ヨミカタ』1941年2月7日発行、1941年3月15日翻刻発行、日本書籍、6～7頁。

⁴ 玉砕：「玉とくだけの」の意味で、部隊の全滅を美化して示す表現。1943年頃から大本営発表として使用された。

⁵ 陸軍士官学校は旧日本陸軍の将校を養成する学校で、特に陸軍幼年学校（旧制中学校1年修了程度の者が入学。3年制）を卒業して入学するのが陸軍のエリートコースとされた。

⁶ 福島高等商業学校：福島県福島市にあった官立の高等商業学校。戦後は福島大学経済学部を経て、現在は福島大学経済経営学類となっている。

⁷ ポツダム宣言を受諾して敗戦した後、多くの軍人は1階級昇進して除隊した。多くの「ポツダム少尉」が誕生したことで知られる。

⁸ 中支：中国の中部地域（長江の中・下流域）を指す言葉。

⁹ 四方拝：四方節とも言う。1月1日に行なわれた戦前の学校行事。紀元節（2月11日・神武天皇即位日）、天長節（4月29日・昭和天皇誕生日）、明治節（11月3日・明治天皇誕生日）とともに四大節と呼ばれた。長時間にわたる厳粛な儀式が遂行された。

思います。そういう時代でした。

— 戦争中ですと、学童疎開はありましたか。

秋田市でも疎開はありました¹⁰。縁故での疎開先のない者は、学校で行くことになります。上級生はすでに行っていました。私は、近在に親戚があることにして、疎開したことにしました。それで家にいました。そのため空襲にあうことになりました。逆に、友人の中には、東京などから親の関係で疎開してきた者もいました。

— 8月15日前後は、どのような状況でしたでしょうか。

2年生で終戦を迎えました（1945年8月15日）。終戦の8月15日の前夜である14日に、空襲を経験しました¹¹。夜に照明弾が炸裂し、家のある市街地から、近くの寺町の墓地に避難しました。その墓地から、土崎港の方向に空爆が行なわれているのを、一晩中、見ていました。あとで分かったのですが、土崎の製油所をねらったものでした。八橋油田からの製油施設がありました。八橋油田は当時日本の二大油田の一つであったからでした。

翌日、あの終戦の詔勅の放送があったことから、アメリカ軍は終戦をすでに知っており、あの空襲で多くの人が死去したことに、大変に憤りを感じました。教師となつてから、このことはずっと生徒たちに話し続けました。

8月15日の放送は、自宅の雑貨屋に近所の人も集まって聞きました。暑い日でした。言葉が難しく分かりませんでした。大人に聞きましたら、「日本が負けたんだ」ということでした。よく覚えているのは、その日から家の電燈が明々と照っていたことです。それまで電燈は黒い布で覆われていました。

2. 戦後の国民学校・小学校

— 戦争が終わった後の学校の状況をお聞かせ下さい。

2年生の教科書は墨で塗らされたり、3年生の教科書は製本されていない教科書であったりしました¹²。新聞紙のような教科書を自分で切って製本しました。ちゃんとし

¹⁰ 秋田県内では、秋田市・能代市・船川港町（現・男鹿市）が学童疎開をすべき対象であった（『秋田市史 第五巻 近現代Ⅱ通史編』秋田市編集発行、2005年、270頁）。

¹¹ 土崎空襲：1945年8月14日夜から15日未明にかけての134機の爆撃機による大規模な空襲。250名を超える死者を出した。米軍による最後の空襲の一つ。

¹² 1945年8月の敗戦後の教科書は、1945年度2学期以降は戦争中の教科書の「墨塗り」で対応し、1946年度は戦争中の教科書から戦後において都合の悪い部分を削除して編集した暫定教科書を発行

た教科書は、昭和 22（1947）年の 4 年生くらいからでした。

その他に忘れられないのは、自分たちの小学校が進駐軍（アメリカ軍）によって取り上げられたことでした¹³。しかも、隣にあった高等科（国民学校高等科）の校舎は、接収していた進駐軍が失火で焼いてしまいました。そのためなのかは、はっきりしませんが、旭北小学校の子どもたちは分けられて、他の小学校を転々としました。

2 年生の後半のときには、近くの保戸野小学校（秋田市保戸野すわ町）で午前中に授業を受けました。保戸野小学校の人たちは午後授業を受けていました。二部授業でした。それから、さらに分けられて、私たちは中通小学校（秋田市中通）にも行きました。肩身の狭いものでした。また、いじめられました。進駐軍は比較的新しい建物を接収したようでした。案外、でたらめも多かったようで、旧制の秋田中学も接収されて、校舎を火事で焼かれています（1945 年 12 月 5 日）。これは後の秋田大学教育学部のあたり（秋田市手形学園町）にあったはずで。

接収された小学校が戻ってきたのは、4 年生か 5 年生のときでした。ただ、校庭はジープが走行するのに都合のよいように石炭のガラが敷き詰められ、裸足で運動するには都合の悪いグラウンドでした。また、トイレも椅子式でびっくりしました。私たちは、グラウンドの整備に勤労奉仕をしました。

一 戦後の小学校の教育はどのようなものでしたでしょうか。また、新しく始まった社会科についてもお聞かせ下さい。

授業内容については、先生たちは熱心でした。「国家の未来は君たちの双肩にかかっている」との熱い語り口でした。私の受け持ちの先生は、4 年生と 5・6 年生ともに師範学校の出身のかたでした。しかし、後から考えますと、他のクラスの担任は、旧制の中学校や高等女学校を出ただけの臨時の若い先生がたでした。県都の秋田市でさえこういう状況でした¹⁴。

一番授業で鮮明に残っているのは、国語ですね。心に訴えるような文章が多かったように感じます。中谷宇吉郎¹⁵の文がとて印象に残っています。

社会科と言えば、4 年生のときの 2 学期かと思いますが、全市の小学校の教師が参観している中で、私が研究発表をさせられたことがありました。東南アジアの地理的

して対応した。暫定教科書は挿絵もほとんどなく、新聞用紙に印刷して何分冊にも分けて製本もせず学校に配布された大変に粗末なものであった。その間に 1947 年度用の新しい教科書を編集した。

¹³ 戦後、日本に進駐した占領軍は各地の建物等を接収して使用した。秋田市にも軍政部が置かれた。秋田市で接収された学校は、鉱山専門学校、秋田中学校、旭北国民学校初等科・高等科であった（『秋田県教育史 第六巻 通史編二』秋田県教育委員会編、秋田県教育史頒布会、1986 年、640 頁）。

¹⁴ 前掲『秋田県教育史 第六巻 通史編二』によれば、秋田県での有資格教員不足は深刻で、1951 年度の小学校教員では大学または教員養成諸学校卒業者が 37.3%であったという（670～672 頁）。

¹⁵ 中谷宇吉郎：1900～1962 年、物理学専攻。随筆を含めた多くの著作を著した。

なことを発表した記憶があります。教室の窓からも多くの先生たちが見ている前でした。当時の問題解決学習という潮流の中であったと考えられます。このとき地図を描いたのを覚えています。兄たちが持っていた年鑑のようなものを、ふだん使っていたために、白羽の矢が立てられたのかとも思います。内容は東南アジアの山や川などの地形についてであったと記憶しています。

調べ学習は、かなりやっていましたね。見学も、寺をまわったり、色々なところをまわったりして歩くのが主であったと思います。また、憲法のことも聞いた覚えがあります。

一方で、当時の生徒指導では、体罰は普通でした。また、「全体責任」とか「級長（今のクラス委員長）の責任」とかで体罰を受けました。私は、この「級長の責任」ということに大変に理不尽を感じました。級長は、今で言えば管理職の一端を担わされていたわけです。ですから、自分が教師になってからは、絶対にこういうことはやるまいと決意しました。

3. 秋田市立高陽中学校

— 中学校での生活はどのようなものでしたでしょうか。

秋田市立高陽中学校に、昭和 25（1950）年 4 月に入学しました。1 年生のとき、校舎は小学校の間借りでした。「六三制 野球ばかりが 強くなり」と言われたように、私も含めて男子は野球に熱中していました。

朝鮮戦争が起こり（1950 年 6 月）、金ヘン・糸ヘン景気¹⁶に世間は沸きました。進駐軍に焼かれた隣の高等科の校舎から金屑^{かなくず}を拾い、野球部の部費の一部にしたこともありました。

先生がたは若く、大半は 20 歳代でした。1 年生のとき教わった書道の先生は半紙いっぱいを書く私の字をほめて下さいました。のびのびと書いているのをほめて下さったのだと思いました。3 年生のとき教わった国語の先生は百人一首を教科書から離れて教えてくれました。自由な雰囲気だったのです。

また、覚えているのは、今はない職業科という教科があったことです¹⁷。男子は職業科、女子は家庭科でした。商業では数字の書き方や簿記を教わりました。今でも忘れられない用語があります。「減価償却」です。今の子どもたちには分からない言葉です。工業では製図をやりました。商業の基礎は義務教育で教えておく必要があると思

¹⁶ 朝鮮戦争（1950～1953 年）を背景とした金属・鉄鋼産業や繊維産業の急激な伸びを言う。

¹⁷ 新制中学校で始まった職業科は、この時期には職業・家庭科となっていた。当時の職業科と家庭科の性格や内容、関係についての議論は、佐々木享「職業科と家庭科の「統一」—職業・家庭科の成立をめぐる評価について—」（『技術教育学研究』第 6 号、1990 年 3 月）が論点を整理している。なお、1962 年度からは、技術・家庭科として現在に至る。

います。職業科は、今は技術科になったのだと思います。それから、英語の授業はよく覚えています。若い女性の先生でしたし（笑）。

— 中学校での社会科は、どのようなことをしていましたか。社会科と日本史があった時期と聞いています¹⁸。また、当時の教科書をいくつかお持ちしましたが、ご記憶にありますか。

社会科の教科書は、單元ごとのパンフレットのようなものであったと思います。『社会の政治¹⁹』は、使った覚えがあります。

1年生のときの社会科の先生からは、戦争のときの南洋の話をずいぶん聞きました²⁰。日本史はよく覚えていません。3年生のときは、政治や経済の話だったと思います。

高陽中学は、私たちが卒業したら無くなってしまいました。近くの成和中学と合併されて、今は山王中学²¹になっています。この頃に中学校の再編がありまして、いくつかあった秋田市の旧市街の中学校は、秋田南中学（秋田市南通宮田）、秋田東中学（秋田市手形休下町）、山王中学の3つになってしまいました。昔の中学の名前のほうがよかったと感じました。

4. 秋田県立秋田高等学校

— その後、秋田高校に進学されたと同っていますが、どのような学校でしたでしょうか。

昭和28（1953）年4月、秋田県立秋田高等学校に入学しました。旧制の秋田中学校が秋田南高校となり、同じく旧制の秋田高等女学校が秋田北高校になっていました²²。その秋田南高校が、私が入学した年に、秋田高校と名前を変えました。それから、し

¹⁸ 中学校の社会科は、3年間の総合的な内容による社会科とは別枠で、「国史」が2～3年生で置かれて始められた。「国史」の「日本史」への改称を経て、1951年版学習指導要領（『学習指導要領一般編（試案）—昭和26年（1951）改訂版—』文部省、1951年7月）により、「日本史」の別枠はなくなったが、多くの中学校では「日本史」検定教科書での授業が継続されたとされる。「日本史」検定教科書は1957年度使用まで発行されている。

¹⁹ 文部省『社会の政治 中学校三年用』（社会科15）、1949年8月翻刻発行、1950年4月10日修正発行、日本書籍、中社902。

²⁰ 南洋（南洋諸島・群島）は、太平洋におけるミクロネシアと呼ばれる地域。第一次大戦後、日本が委任統治領として南洋庁を置いて統治し、多くの日本人が居住していた。

²¹ 秋田市立山王中学校（秋田市山王）。なお、1953年に5つの中学が3つに再編成された。

²² （旧制）秋田県立秋田中学校は、1873年の洋学校を起源とし、いくつかの名称変更を経て、1901年以後、秋田県立秋田中学校と称していた。新学制下で秋田県立秋田南高等学校となり、1953年に秋田県立秋田高等学校と改称した（秋田市手形中台）。（旧制）秋田県立秋田高等女学校は1901年に開設され、新学制下で秋田県立秋田北高等学校となった（秋田市千秋中島町）。

ばらく経ってから、これとは全く別に、秋田南高校²³が開設されています（1962年）。

秋田高校は、1学年10クラス、約500名のマンモス校でした。そのうち、女子は30名ほどでした。私より2年上の学年から女子が入るようになりました。今は、男女半々でないかと思います。その30名ほどの女子が、2クラスに分かれて入っていました。私は3年間、男ばかりのクラスでした（笑）。クラスのみんなは、よくできる、今から思えば、理系のクラスに入ったようです。

— 当時の秋田市の中学卒業生はどのくらい高校に進学していたのでしょうか。また、秋田市に高校はどのくらいあったのでしょうか。

中学のときの同級生は、秋田市内ということもあったのか、就職は1割くらいで、ほとんどが高校に進学していました。ただ、定時制高校に進んだ人もたくさんいました。

当時の秋田市内の高校は、秋田高校、秋田北高校、秋田工業高校、秋田商業高校、秋田市立高校、金足農業高校があり、それから、秋田短大附属高校が新しくできました²⁴。秋田商業高校は戦争中に一時募集が停止されたため、数年間は卒業生がいない時期もありました²⁵。

この頃にはまだ中学卒業生の集団就職というのはありませんでした。「金の卵」とか聞くようになったのは、私が大学生であった数年後からです。

— 高校での授業や部活動についてお聞かせ下さい。

高校に入ってから野球はやめて、陸上競技部で長距離をやっていました。それから私が入学する前年までは、土曜日休みの五日制でした²⁶。

1年生のときは英語の2クラスをAとBとに分け、能力別の授業を行っていました。私は、始めはAのクラスでしたが、2学期からはBのクラスに落とされてしまい、悔しい思いをしたことがありました。高校入試では英語はありませんでした²⁷。英語

²³ 秋田県立秋田南高等学校（秋田市仁井田緑町）。

²⁴ 秋田県立秋田工業高等学校（秋田市保戸野金砂町）、秋田市立秋田商業高等学校（秋田市新屋勝平台）、秋田市立高等学校（現在の秋田県立秋田中央高校、秋田市土崎港南）、秋田県立金足農業高等学校（秋田市金足追分）、秋田短期大学附属高等学校（現在の明桜高等学校、秋田市下北手桜）。

²⁵ 戦時非常措置により秋田市立商業学校は1944年4月に秋田市立工業学校に転換された。

²⁶ 秋田県での学校五日制度は、水害や食糧難などにより1947年10月から一部の、1948年1月からすべての学校において実施された。小中学校では1952年4月から旧に戻され、高校は各校に任された（前掲『秋田県教育史 第六巻 通史編二』、649～651頁）。

²⁷ 秋田県立高校の入試問題に英語を含めるか否かは議論が続き、1955年度から正規の学力検査教科となった（前掲『秋田県教育史 第六巻 通史編二』、794～796頁）。

をやっていない中学もあったようです。英語の能力別のクラスはそのためだと思います。

社会科は、1年生で一般社会、2年生で世界史、3年生で日本史を選択しました。1年生での一般社会は必修で、2年から選択でした。

他に選択科目として人文地理、時事問題がありました²⁸。人文地理を選択した人は多かったようですが、時事問題を選択した人は少なかったようです。基本的にはクラス単位で授業を受けていました。すべて5単位でした。世界史は、西洋史3単位、東洋史2単位に分かれていました（笑）。

数学も5単位で、1年生で解析Ⅰ、2年生で幾何、3年生で解析Ⅱを学習しました。理科も5単位で、1年生で地学と生物のどちらかの選択で、私は地学を選びました。2年生で化学（無機化学）3単位、物理2単位、3年生では化学（有機化学）2単位、物理3単位でした。

漢文や芸術（音楽、美術）、商業は選択科目でした。このときくらいから、進学用の教育課程が編成され出したのかもしれませんが、強調したいのは、漢文が必修ではなく、選択科目であったことです²⁹。

— 世界史が東洋史と西洋史に分けられて授業があったというお話ですが、担当の先生や教科書はどうなっていたのでしょうか。

東洋史と西洋史の先生は別々でした。試験も別々でした。教科書は一緒に、好学社のものを使っていました³⁰。西洋史は慶応大学を出た大場先生で、英語も教えていた山岳部の顧問でした。おもしろい授業でした。ルネサンス以降の新しい考え方を教えてくれました。それと山の話でした。東洋史のほうは、地理が専門のご年配の先生でしたが、ただ教科書を読む程度でおもしろくありませんでした。東洋史と西洋史の授業は互いに全く関係がありませんでした。どこまで進んだのかは、はっきり覚えていません³¹。

²⁸ 原田氏が高校に在籍していた1953～1955年度は、前掲の1951年度版学習指導要領による教育課程が実施されていた時期である。1956年度からは『高等学校学習指導要領一般編 昭和31年度改訂版』（文部省、1955年12月）が適用されて、社会科は3～5単位の社会（社会科社会と呼ばれた）、日本史、世界史、人文地理から社会を含めて3科目履修とされた。

²⁹ 戦前においては「国語漢文」として中等国語教育の中で漢文は重要な位置を占めていたが、戦後は必修から外され、使用漢字制限の議論も絡んで、その履修のあり方が議論された。

³⁰ 大類伸監修・吉岡力他編『高等世界史』（好学社、1952年7月30日検定、高社1135）が1953～1954年度に使用された。

³¹ 西洋史の授業は19世紀まで進んだ（同級生の話として原田氏の補足による）。

1年生のときの一般社会は、講義式の授業でしたが、かなりおもしろかったです³²。

3年生のときの担任の磯貝先生が日本史でした。もともと東洋史専攻のかたで、外交文書のようなものを出して、幕末の話ばかりをされていました。とにかく試験だけは難しくて悪評でした(笑)。磯貝先生は後に群馬の県立博物館にいらっしゃいました。

— 試験が難しかったということですが、論述による試験でしょうか。

記述はあまりなく、せいぜい「用語を答えよ」のような問題であったと思いますが、細かいことは覚えていません。ただ、友人が言うには、難関の大学入試問題を出してきたりしたそうです。私は全然わかりませんでした(笑)。教科書や授業とは関係ないようなものを出题していたような記憶もあります。

— 当時の高校の印象はどのようなものでしたでしょうか。

高校は、中学とは違って、先生と生徒の関わりが少ないようには感じました。一方で、私には、旧制秋田中学に入学し、在学中に新制高校になって卒業した兄がいましたが、同じ学校に6年間いたことになります。昭和5(1930)年から昭和8(1933)年の生まれくらいの人たちです。とても結束が強いと感じました。もちろん新制高校になったときに定員も増えたようで、新制中学校から入ってきた人たちもいましたが。

それから、よく覚えているのは、私が1年生のときまで全国一斉の進学適性検査があったことです³³。俗に“進適”と言ったものです。進適は、学力検査と知能検査を合わせたようなものと私は推測しています。私の学年は受けていませんが、当時の3年生は受けていました。進適の成績の良い生徒は、学校の廊下の壁に貼りだされていたのを覚えています。

5. 秋田大学学芸学部

— その後の大学でのことをお聞かせ下さい。

昭和31(1956)年4月、秋田大学学芸学部一部甲類社会科に入学しました。一部が

³² 労働法、清水幾多郎の社会思想、田中美知太郎などが取り上げられて、複数の教師により授業が進められた(同級生の話として原田氏の補足による)。

³³ 進学適性検査:1947年度の官立高等学校専門学校の志願者に「知能検査」として実施が始まり、1948年度に「進学適性検査」と改称して、1949年度の国立大学入試(次第に公私立大学も参加)に受け継がれた検査。知能検査の性格を持つものなので準備は不要で効果もないと言われたが、受験参考書や模擬テストも存在し、1954年度入試まで実施された。佐々木享「新制大学入試はじまる(Ⅱ)大学入試の歴史(第15回)」(『大学進学研究』第53号、大学進学研究会、1988年1月)に詳しい。

4年課程、二部が2年課程で、甲類が中学校高校課程、乙類が小学校課程でした。甲類全体で一般教養を受講するシステムでした。社会科全体で定員は16名ほどで、その内、女子は1~2名でした。大体が県内出身者で、社会科は全員県内出身者でした。受験倍率が高かったため、受験するときに友人から「お前は受かるのか」と言われたのを覚えています(笑)。

当時の秋田大学は、学芸学部と鉱山学部の2つしかありませんでした³⁴。学芸学部は、後に教育学部になって、今は教育文化学部になっています。鉱山学部は、今は工学資源学部になっています。

卒業後は、高校へ5名くらい、小学校へ2名くらい、残りは中学校に就職しました。社会科は、歴史・地理・法政の3つの研究室に分かれていました。歴史は先生が一番多かったのですが、私は所属を歴史に決めました。先生がたは、日本古代史が1名、日本近世史が1名、古代史とキリシタン史が1名、東洋史が1名、西洋史が2名でした。秋田大学史学会という組織にも加入しました。

— 原田先生は、歴史の中の東洋史を選ばれたのでしょうか。

私は後に東洋史を勉強するようになりますが、このときは日本史で、古代史でした。古代史では、新野直吉³⁵先生が有名ですが、私は、キリシタン史もやっていた今村義孝³⁶先生につきました。近世史では、半田市太郎³⁷先生がいました。

卒論は古代の戸籍について書きましたが、全然わからなくて。今から思えば、あれでよく通してくれたものです(笑)。

大学ではアルバイトに専念し、勉強はあまりしませんでした。

— どのようなアルバイトでしょうか。

アルバイトは秋田魁新報社³⁸のラジオ部での仕事でした。共同通信社からの記事をニュース原稿にしたり、新聞記事をラジオ向けに口語に直したりして、放送原稿を書いていた。専門の記者はいるのですが、夜は学生2人がアルバイトで任されていました。おもしろい仕事でした。そのため3~4年のときは、大学にはあまり行きませんでした(笑)。

³⁴ 秋田大学は、秋田師範学校、秋田青年師範学校、秋田鉱山専門学校をもとに1949年に学芸学部(後に教育学部、現在は教育文化学部)と鉱山学部(現在は工学資源学部)の2学部で創立され、1970年に医学部が加わった(秋田市手形学園町など)。

³⁵ 新野直吉:1925年生まれ、日本古代史・東北史専攻。

³⁶ 今村義孝:1908~2007年、キリシタン史・日本古代史専攻。

³⁷ 半田市太郎:日本近世史専攻。

³⁸ 秋田魁新報社:秋田市を中心とした秋田県の日刊新聞『秋田魁新報』を発行する新聞社。

— 社会科教育法の講義はどのようなものでしたでしょうか。また、教育実習は、どちらに行かれたのでしょうか。

社会科教育法は、西洋史が専門の先生が担当されていましたが、あまり印象に残っていません³⁹。私の印象に残っているのは、英語科教育法で、当時革命的と言われた英語教育方法の講義でした。

教育実習校には、附属校と協力校がありましたが、私は協力校の秋田市立東中学校に行きました。4年次に、4月初めの2週間、プラス6月中頃からの6週間の合計8週間の教育実習を行なった記憶があります。

私が本当に教師になりたいと思ったのは教育実習をやってからでした。教育実習の指導教官の真井田善悦先生から、私が得意になってペラペラ話すことに対し、「生徒の琴線に触れる授業をしなければならない」と教育実習日誌に書かれたことは、今でも頭に刻まれています。その後、教師となり、授業に臨む指針となりました。

6. 秋田と埼玉における中学校での授業

— 大学卒業後に教師になられた頃のことをお聞かせ下さい。

昭和35(1960)年3月、秋田大学を卒業しましたが、就職難の時期でした。5月1日に産休の代替で秋田県内の中学校に就職しましたが、ここでは“無免許”で英語を担当しました。7月1日に十四条休職⁴⁰の代替でやはり県内の小学校に就職しました。小学校では仮免許で教えていました。

教諭になったのは昭和36(1961)年の4月1日、県内の能代市立東雲中学校(能代市向能代)でした。このときは社会科を教えました。地理を教えた覚えがあります。

— 埼玉に移られたのは、その後のことでしょうか。

その後、叔父の家を継ぐということで、埼玉県に移り、昭和37(1962)年5月1日に埼玉県内の新座町立大和田中学校⁴¹に赴任しました。この頃、三河島事故⁴²がありました。

³⁹ 講義内容は、授業の素材としての基礎事項、その指導と評価の方法であった(同級生の話として原田氏の補足による)。

⁴⁰ 教育公務員特例法第14条にある「結核性疾患のため長期の休養を要する場合の休職」を指す。

⁴¹ 現在は、新座市立新座中学校(埼玉県新座市野火止)。

⁴² 三河島事故:1962年5月3日に起きた常磐線三河島駅(東京都荒川区)での列車の多重衝突事故。死者160名という大惨事であった。

大和田中学校は、近所の朝霞にあった旧軍隊の建物を移築した平屋建ての古い校舎で、体育館もありませんでした。とにかく砂ぼこりがすごいところでした。各学年4クラスで、どんどん人が増えていく時期でした。社会科担当は3~4人いたと思います。授業はたしか週24時間くらい持たされて、ほとんど空き時間がありませんでした。

この頃の中学校教育では、郷土学習が歴史的分野のトップにありました。大和田中学では、郷土クラブの指導などもしていました。生徒は20~30人いたと思います。生徒を、平林寺（新座市野火止）や片山あたり⁴³のお寺など、色々なところに連れて行って、資料をもらって来たりしました。文化祭などでも発表していたと記憶しています。新座町の小学校と2つの中学校の教師が集まって、郷土の歴史を調べるための郷土クラブの手引書を作ったこともありました。

— そのときの社会科の教科書は、ご記憶にありますか。

教科書は中教出版のものを使っていたと思います。1年が地理、2年が歴史、3年が公民で授業をしていました。2年生の歴史的分野の教科書は黄色い表紙の豊田武監修でした⁴⁴。

今年（2013年）あったクラス会で元的女子生徒から言われた思い出話に、「先生から、『なぜ日本では農機具を使用できないのか』と質問されて答えられず、家で尋ねたら『大規模でないから』と教えられた」というのがありました。私はすっかり忘れていました。

— 社会科の教師として、どのような授業を目指していたのでしょうか。

この5年間で考えていたことは、どういう人間に育てるかでした。教育の目的と言ってもいいでしょう。歴史教育の目的というのではなく、社会科の目的と言ってもいいでしょう。それは、生徒に生き抜く力を身に付けさせること、特に社会事象や人間を見抜く力を付けさせることでした。別の言葉で言えば、だまされない人間をつくることでした。物事について“おかしい”と感じ、それを外部に発信できる人間をつくることでした。

それは、私が早く両親を失い、早くから自立して生きねばならないことに起因するかもしれません。社会事象を見抜く目をどう養うか、それは“おかしい”と思うことです。知識を獲得することが、絶対に必要だと確信していました。時代は問題解決学習から系統学習に変わっていたのかもしれませんが。

⁴³ 旧・片山村は新座市の南部。1955年に片山村と大和田町が合併して新座町となっていた（現・新座市）。

⁴⁴ 豊田武ほか6名『中学生の社会科 日本のあゆみと世界』中教出版、1961年4月20日検定（社会8002）。本書は1962年度から1965年度まで使用された。

この頃、私は歴史教育者協議会の『歴史地理教育』を定期購読していました。そのリーダーの本多公栄⁴⁵氏の著書に傾倒していました。

7. 定時制高校への転任と大学院への入学

— 高校へは大和田中学校から転任されたのでしょうか。

昭和 40 (1965) 年 4 月、埼玉県立川越高等学校定時制課程⁴⁶に転任しました。この昭和 40 (1965) 年 4 月から昭和 53 (1978) 年 3 月まで、私は定時制課程の教員でした。ちょうど大学院に通っていた時代で、研究者としても教員としても中途半端でした。

— 大学院に入られたいきさつをお聞かせ下さい。

川越高校の定時制に行きましたら、若い教員はみんな大学院で勉強していました。すでに出た人もいました。後に秋田大学に行った人で持田行雄⁴⁷さんという人がいましたが、その人は東京教育大学の倫理学の博士課程に入っていました。一緒に川越高校に転任した 4 つ年上の笹森健⁴⁸さんは、転任と同時に青山学院大学の大学院に入って、後に青山学院の教育史の先生になりました。他にも周囲には、国際基督教大学・東京大学・早稲田大学の大学院で勉強していた人もいました。そういうことで、勉強していなければ恥ずかしくていられませんでした。

それで昭和 43 (1968) 年に東京教育大学⁴⁹の東洋史のマスターコース (修士課程) に入りました。ここは入りやすいと思って入りましたが、後で考えると大変なところに入っていました。木村正雄⁵⁰先生のところで取って頂き、昭和 46 (1971) 年に修了しました。このときは、安史の乱について研究しました。同級生には笠原十九司⁵¹さん、小杉修二⁵²さん、馬場毅⁵³さん、大島立子⁵⁴さんがいました。

ドクターコース (博士課程) は 1 年間あいて、昭和 47 (1972) 年に入りました。こ

⁴⁵ 本多公栄：1933～1995 年、社会科教育・歴史教育専攻。その著作は『本多公栄著作集』（本多公栄著、岩本努ほか編、ルック、1994 年）全 8 巻・補巻 1 にまとめられている。

⁴⁶ 埼玉県立川越高等学校定時制課程（川越市郭町）。定時制課程は 2011 年閉鎖。

⁴⁷ 持田行雄：1937 年生まれ、倫理学専攻。

⁴⁸ 笹森健：1933 年生まれ、教育学専攻。

⁴⁹ 東京教育大学（東京都文京区など）：現在の筑波大学（茨城県つくば市など）。

⁵⁰ 木村正雄：1910～1975 年、東洋史専攻。

⁵¹ 笠原十九司：1944 年生まれ、東洋史専攻。

⁵² 小杉修二：1944 年生まれ、東洋史専攻。

⁵³ 馬場毅：1944 年生まれ、東洋史専攻。

⁵⁴ 大島立子：1944 年生まれ、東洋史専攻。

ここでは石田肇⁵⁵さんと一緒になりました。定時制高校の教員でしたので、大学院に在籍していることは公にはできないことでした。大学院のほうでは、高校の教員であることは特に聞かれませんでした。

一 埼玉県高等学校社会科教育研究会で唐代の官僚制について報告されたり⁵⁶、川越高校の紀要に安史の乱について書かれたり⁵⁷したのは、この時期のものかと思いますが。

昭和 43 (1968) 年 2 月の研究会での「唐代の官僚制」の発表は、誰かから声をかけられて、大学院に入学する前にこれまでに勉強したことをまとめようと思って話したものと記憶しています。

昭和 46 (1971) 年の川越高校図書館紀要の「安史の乱」の論文は、修士論文をもとにして書いたものでした。

8. 「倫理・社会」「現代社会」と埼玉県高等学校社会科教育研究会

一 埼玉県高等学校社会科教育研究会での活動についてお聞かせ下さい。

昭和 40 (1965) 年 4 月に定時制課程の教員になったとき、「倫社」(倫理・社会)、現在の「倫理」を担当させられました⁵⁸。この科目はこの時期に新設された科目で、誰も持ち手がなく、いちばん若い私に“お鉢”が回ってきたのでした。哲学や倫理を担当した教員が少ないことも、その原因だったのです。先輩の先生も言っていたが、ある意味で、一番自由にやりえた科目でした。

「倫社」を教えるために、その解決を私は外部に求めました。それは現在も存続している埼玉県高等学校社会科教育研究会(高社研)の社会部会の研究会に出席したことでした。歴史部会、地理部会、社会部会の3部会から成り立っていました。社会部会とは、要するに「倫社」と「政経」(政治・経済)のための部会でした。

その後、社会部会の委員も務めるようになりました。昭和 49 (1974) 年 4 月に、浦和高校定時制課程⁵⁹に転任してから本部事務局で会計を担当しました。定時制課程の

⁵⁵ 石田肇：1947年生まれ、東洋史専攻。

⁵⁶ 原田善治「唐代の官僚制—特に吏部官僚について—」(『歴史部会活動状況』『社会科研究集録』第4号、埼玉県高等学校社会科教育研究会、1968年3月)。

⁵⁷ 原田善治「安史の乱—その前夜の政争について—」(『川越高校図書館紀要』第8集、1971年)。

⁵⁸ 1960年版高等学校学習指導要領(1963年度から学年進行で実施)により、これまでの社会科「社会」が「倫理・社会」と「政治・経済」となった。そして、1978年版高等学校学習指導要領(1982年度から学年進行で実施)で「現代社会」が設置されたことにより、「倫理・社会」は「倫理」となって今日に至る。

⁵⁹ 埼玉県立浦和高校定時制課程(さいたま市浦和区領家)。

教員は、私の反骨心にはピッタリとしたものでした。

埼玉県高等学校社会科教育研究会は、地域的に東西南北に分かれていて、それぞれの部会が学期ごとに研究会を開いていました。会誌の『社会科研究集録』の編集や管外巡検の担当は各部会が交代で担当していました。これとは別に、この当時、同和教育が盛んでした。各地で糾弾が行なわれましたが、私はこれには深入りしませんでした。

— 高社研での「現代社会」への取り組みについてお聞かせ下さい。

昭和 53 (1978) 年 4 月、春日部女子高校⁶⁰に転任しました。ここでは高社研の本部事務局を担当しました。今村広一校長が高社研の会長でしたので、本部事務局を春日部女子高校の社会科が担当していました。

この頃、「現代社会」という新しい科目が設置され、ちょうど実施が始まる時でした⁶¹。これをどうするかを盛んに話し合っていました。私は、地理・歴史・社会の 3 部会とは別に、「現代社会」の会を本部事務局が立ち上げるべきことを、会長に提案しました。「現代社会」は地理・歴史・社会を横断していくものでないと、研究ができないと考えたためです。

そこで、私が事務局を担当して、「現代社会等研究委員会」が昭和 55 (1980) 年に組織されました。委員会の選出方法も私が提案したのですが、地理・歴史・社会の 3 部会からの推薦者と一般参加者に、会長と事務局とで構成しました。社会部会から参加した浦和商業高校の内海次登さんが活躍してくれました。

— 委員会の初年度である昭和 55 (1980) 年度の記録を見ますと、8 回の研究委員会を開き、埼玉県労働会館での研究大会は 170 名が参加しています⁶²。

あの頃は、みんなが熱かったですね (笑)。新しく始まる「現代社会」をどうするかは、とても大きな問題でした。特に、不安であったのは、「現代社会」の内容に文化も入る点でした。その他の内容は、だいたい他の科目にもあったのでよいのですが、文化の取り扱いにはみんなが悩んでいました。

それから、埼玉県の伝統なのか、このような研究会に参加する際には出張扱いであったりして、とても参加しやすくなっていました。

— 『社会科研究集録』第 19 号を見ますと、「現代社会」等研究委員会は昭和 57 (1982)

⁶⁰ 埼玉県立春日部女子高校 (春日部市粕壁東)。

⁶¹ 「現代社会」は、1978 年版高等学校学習指導要領 (1982 年度から学年進行で実施) で設置された新科目で、当時は高校 1 年次に 4 単位必修であった。

⁶² 原田善治「現代社会等研究委員会活動と「現代社会」等研究大会」(『社会科研究集録』第 17 号、埼玉県高等学校社会科教育研究会、1981 年 3 月)。

年に「現代社会」研究委員会に名称が変わっていますが⁶³、組織したときに、なぜ「等」を入れたのでしょうか。

そうでしたか（笑）。今となつては、思い出せませんね。ただ、「現代社会」以外のことも協議したかったのかもしれない。

一 『社会文化史学』に書評⁶⁴をお書きになったり、『世界史用語問題集⁶⁵』を出されたりしたのは、浦和高校定時制にいらした時期だと思いますが。

松本善海先生の『中国村落制度の史的研究⁶⁶』の書評を書いたことを、自分ではすっかり忘れていました。これは難しい本でした。『世界史用語問題集』は、職場で1年ご一緒した九里幾久雄さんから誘われたものでした。

9. 新設高校への転任から定年退職まで

一 春日部女子高校には何年までいらしたのでしょうか。

昭和56（1981）年4月、南稜高校⁶⁷に転任しました。新設2年目の高校でした。そこで感じたのは生徒・保護者の変質でした。教科指導よりも生徒指導が重視されました。私にとっては、ショックでした。それは、生徒指導と教科指導が二本柱であることに私が気付いていなかったことに起因するものでした。保護者召喚でも呼び出しに応じない保護者には驚きでした。

そして、平成元（1989）年4月に戸田高校⁶⁸に転任しました。教科指導よりも、生徒指導を主要な課題とする学校でした。生徒指導を熱心に行なえば行なうほど、退学者が増えていきました。無断欠席の生徒に家庭訪問を行なえば、結局は退学してしまう、しかも、家庭訪問などしないで放っておいた担任のクラスのほうが退学者数が少ないなど、矛盾を感じました。

教科指導（学習指導）も退学をできるだけさせないように行ないました。試験の範囲を短くし、太字の用語を出すことなどを予告し、生徒になるべく欠点を出させない

⁶³ 中久保斉「「現代社会」研究委員会活動報告」（『社会科研究集録』第19号、埼玉県高等学校社会科教育研究会、1982年3月）。

⁶⁴ 原田善治「書評 松本善海『中国村落制度の史的研究』（『社会文化史学』第14号、社会文化史学会編、総合歴史教育研究所、1977年7月）。

⁶⁵ 九里幾久雄・坂本博・原田善治編『世界史用語問題集：一問一答』山川出版社、1979年。

⁶⁶ 松本善海『中国村落制度の史的研究』岩波書店、1977年。

⁶⁷ 埼玉県立南稜高等学校（戸田市美女木）。

⁶⁸ 埼玉県立戸田高等学校（戸田市新曽）。2005年に3定時制課程と併せて埼玉県立戸田翔陽高等学校となる。

ようにしました。自分のやっていることに疑問を感じましたが、「高卒」の資格を与えることが、何よりも大切だと考えたからです。

平成6(1994)年4月に、浦和商业高校定時制課程⁶⁹の教頭となりました。ここでは、商業一般の科目を担当させられました。平成8(1996)年4月に、浦和東高等学校⁷⁰の教頭となり、平成10(1998)年3月に定年となって退職しました。

10. その後の世界史授業

— 埼玉県を定年でご退職された後の世界史授業について、お聞かせ下さい。

その後、九里学園浦和実業学園⁷¹の嘱託講師となり、7年間勤務しました。そこでは世界史に専念して世界史教育を一生懸命行ないました。ある意味で、本格的に世界史教育をやったのは、この時期ですね。

定時制に勤めていたときは、毎時間違う教科書を持って教室に行っていました。授業は、英語、世界史、地理、倫理、政経などを担当し、英語だけでも何種類も教科書がありました。その後の高校も新設校でしたから、世界史だけというわけにもいかず、担任の学年によって科目が変わりました。

浦和実業学園での世界史授業については、生徒の実態に合わせた授業の工夫や教科書の性格を考慮した授業の工夫などを『総合歴史教育』に書きました⁷²。浦和実業学園の後には、2年間、私立の開智高校⁷³で非常勤講師を致しました。

11. 漢文史料との取り組み

— 今でも海老澤哲雄⁷⁴先生たちと史料を読まれていると伺っていますが、大学院にいたときから続けているのでしょうか。

海老澤先生の勉強会には1~2年通って、その後は退職してから、また誘いを受けて参加しています⁷⁵。前は『元典章⁷⁶』を読み、その後は『無冤録⁷⁷』、『歴代名臣奏議⁷⁸』

⁶⁹ 埼玉県立浦和商业高等学校定時制課程(さいたま市南区白幡)。定時制課程は2008年に閉鎖。

⁷⁰ 埼玉県立浦和東高等学校(さいたま市緑区寺山上)。

⁷¹ 九里学園浦和実業学園中学校・高等学校(さいたま市南区文蔵)。

⁷² 原田善治「世界史教育と私」(『総合歴史教育』第47号、総合歴史教育研究会、2012年3月)。

⁷³ 開智学園開智高等学校(さいたま市岩槻区徳力)。

⁷⁴ 海老澤哲雄：1936年生まれ、東洋史専攻。

⁷⁵ 本講読会は、1979年に埼玉大学の海老澤哲雄研究室で長谷川誠夫氏・野口周一氏との3名で始められ、その後、時期によって出入があるものの、原田氏や石田憲司氏、渡邊孝氏、田中通彦氏ら、東京教育大学等での東洋史を専攻した研究者が参加して今日に至っている。

⁷⁶ 元典章：中国の元代にまとめられた詔勅・判例集。下級吏員の用いる公文書用の文体(吏牘)やモ

を読んできました。田中通彦⁷⁹さんも来ています。次に、『高麗史⁸⁰』を元宗⁸¹から読もうかと話しています。うちの近くの公民館を借りてやっています。

これとは別に、それまでも友達と二人で色々なものをずっと読んでいました。昭和49（1974）年頃から始めて、今も続いています。もう40年になります。その山野清二郎⁸²さんは、埼玉大学教養学部⁸³にいた国文学専攻の『万葉集』の専門家です。埼玉大学の後は鎌倉女子大学で6年間勤めていました。山野さんとは、川越高校定時制にいたときに転任して来て、一緒になりました。それで、彼も大学院に入って勉強していました。漢文の史料を読むのは、私が誘って始めましたが、むしろ私のほうが彼から漢文を教わったようなものです。国文学でも漢詩集の『懷風藻』などがあり、山野さんも日本漢文の問題から漢文に興味があったようです。

まず、『韓非子』を読み、そして『詩経』を鄭玄注釈で読んで、今は『左伝』（春秋左氏伝）を読んで、そして『左伝』は楊伯峻の4冊の校訂本⁸³で読んでいます。すでに4冊目の中ほどの昭公の何年という終わりのほうに来ました⁸⁴。そろそろ、次は何を読もうかと話をしていますが、彼も忙しいようで、今は月に1度くらいです。

今年から、私も彼の『万葉集』の研究会に出させてもらっています。『万葉集』もおもしろいものですね。

12. 教育の原点

— 歴史教育や歴史学をこれまでご覧になってきて、どのような問題があると感じられますか。

最近の歴史研究は、左翼的な見方がなくなって実証研究が中心になってきましたが、その一方で、細かいことにこだわり過ぎているように感じます。歴史をもう少し大きな目で見る必要があるように思います。

歴史教育は何を教えて行けばいいのかということを考えてきました。なかでも中国

ンゴル文直訳体などの文体を含み、難文として知られる。

⁷⁷ 無冤録：王与撰。中国の元代に記された法医学書。検屍に関する具体例を検討して、社会の実態をありのままに反映した史料として知られる。

⁷⁸ 歴代名臣奏議：中国の明代の黄淮・楊子奇奉勅撰。元代にいたる歴代の奏議を集成した類書。

⁷⁹ 田中通彦：1935年生まれ、東洋史専攻。

⁸⁰ 高麗史：918～1392年の高麗について記した15世紀半ばまでに成立した史書。

⁸¹ 元宗：在位1259～1274年の高麗第24代の王。

⁸² 山野清二郎：1942年生まれ、国文学専攻。

⁸³ 楊伯峻編著『春秋左伝注』（全4冊）中華書局、1981年。

⁸⁴ 中国春秋時代の魯の昭公は元年（前541年）から32年（前510年）まで在位した。なお、『春秋左氏伝』は、魯の隠公元年（前722年）から哀公27年（前468年）までを記載している。

とアメリカの歴史を重視して教えていくことは大切ですね。このことは『総合歴史教育』でも書きました。

また、先ほどお話しした国文学の山野さんからは、「社会科は何をやっているんだ」といつも言われます。それは、国文学専攻に日本史を勉強してこない学生が来るようですが、そのような学生はまったく何もわからず話にならないそうです。

考えさせる授業、これはずっと考えてきました。「なぜ」という問いですね。なぜと問いかけても、直接的な答えは生徒からなかなか出てきませんが、その考えるもとを教えるべきかとも考えてきました。例えば、歴史の動く基盤として経済があると考えていましたので、このようなものを、一種、系統的にどう教えるかも考えていました。

— 社会科や歴史の教師として、心がけてこられたことは何でしょうか。

やはり、何とかして考えさせるということですね。先ほども触れましたが、社会事象を見ぬく目、人間を見ぬく目、そのような力をどうやって養うのか。歴史教育に限らず、社会科教育の最大の目的は、それだと思います。これをどうやって養うのが、一番の眼目であると思っています。それから、当たり前のことですが、徹底して調べて整理して教えることが教育の原点だと思っています。

— 本日は長い時間にわたり、ありがとうございました。

後記

お忙しい中、インタビューのお願いを快くお引き受けいただき、多くの貴重なお話を伺うことができた。敗戦前後の転換期そして戦後の教育の転換期を、生徒・学生として、さらには教師として体験されたお話は大変に興味深いものであった。何よりも中学・高校の社会科教師として幅広く教育実践や歴史研究に取り組み、それを現在も継続されている姿勢には感服するばかりであった。また、記録をまとめる際には、いくどもの問い合わせに懇切丁寧にご教示を下さり、聞き手の力不足を補っていただいた。

最後に、お忙しい中、全面的にご協力を賜りました原田先生に心から御礼を申し上げます。

(注記に関して、さまざまな文献やホームページの情報を利用させていただきましたことを申し添えます。)

(文責：茨木智志)